

お竈 (かまど) 様のお祭 — 中国のお正月を迎える行事

hé yuányuán
何媛媛

日本はもうお正月を迎えました。中国ではお正月は旧暦で迎えますが、2007年のお正月はちょっと遅くて、二月の十八日が元日になります。

中国も間もなく旧暦の12月を迎えますが、12月になりますとお正月を迎えるための行事がいろいろ執り行われ、迎春の雰囲気が増しに濃くなって来ます。それらの行事の中でも12月23日の「竈様のお祭」は人々に良く知られています。

「お竈様」とは、玉皇大帝 (注) によって「九天東厨司命竈王府君」と封じられ、各家の吉凶禍福を司ると共に竈を管理するという中国の伝説上の神様です。家々の保護神として、殆ど家で「お竈様」のお札ふだや絵に描かれた「お竈様」を台所に祀り、人々の崇拜を受けて来ました。

「お竈様の祭」は中国では「祭竈」jì zào 或いは「送竈」sòng zào と呼ばれています。お竈様は、前年の大晦日から、それぞれの家に一年間にわたって住み、家の安全と家族の行動を監視します。そして、お竈様は年に一度、旧暦の12月23日に、に天に戻り、自分が住み着いた家の善行と悪行を玉皇大帝に報告するのです。



玉皇大帝は、その報告を聞いて判定を下し、その家が来年に得るべき吉凶禍福をお竈様に託して大晦日に元の家に帰らせ、新しい一年の仕事を続けてやらせます。ですからそれぞれの家にとってお竈様がどんな報告をするか深い関心があります。そんな訳で、旧暦の12月23日に行う「送竈」と大晦日の「迎竈」yíng zào はずっと昔から人々の大切な行事でした。

昔、「送竈日」の儀式は、所によって違いがありますが、普通は台所に祀ってあるお竈様のお札ふだの前に「麻飴」(胡麻で作った飴) や、竹か紙で作った馬と馬の餌を供え、線香を立てて丁寧に拝み、その後飴をお竈様の口に塗り、「悪い話を話さないで、良い話を話してね」などと願いごとを言います。お竈様への礼拝を終わらせると、画像や馬などを焼いて天に送ります。

現在でも中国の北方では12月23日「麻糖」を食べ、南方では、もち米団子を食べるという習慣があります。いずれもねばねばした甘い食材で作られたものです。「お竈様」に甘いものや粘り強いものを食べさせて、わが家の悪口を神様に告げないよう、よい話をしてもらえようとの思いを込めるのだそうです。

実は「祭竈」の起源は大変古いのです。古書の「礼記 礼器」に、「祭竈」という文字が見られ、周代(紀元前1046年頃～紀元前256年)には正式な祭事としてとり行われていたそうです。

唐代、宋代は、祭竈の供え物は特に豊かだったと言われており、宋の詩人・范成大が著した《祭竈詞》に、民間の竈祭りをを行う風景を覗き見ることができます。

また、1930年代の中国の文豪である魯迅先生も次の《庚子送灶即事》という詩を残し、貧しい家が竈神を祭る情景を描きました。

「隻雞膠牙糖，典衣供瓣香。家中無長物，豈獨少黃羊(鶏一羽と膠牙糖と香を供えて竈の神を送る。供物は着物を質入れして調えた。わが家に余裕は全くなく、黄羊がないばかりかなにもない)」(魯迅全集/訳者：佐藤保)

* 膠牙糖 佐藤保氏の訳文中にある膠牙糖は、中国では「麻糖」と呼ばれ、胡麻、砂糖、大麦、もち米などで作られたべたべたする飴のこと。

* 「黄羊」 中国の西北部の山に棲息している羊の一種。

注：玉皇大帝：中国の道教の伝説中にある神々の最高リーダーです。